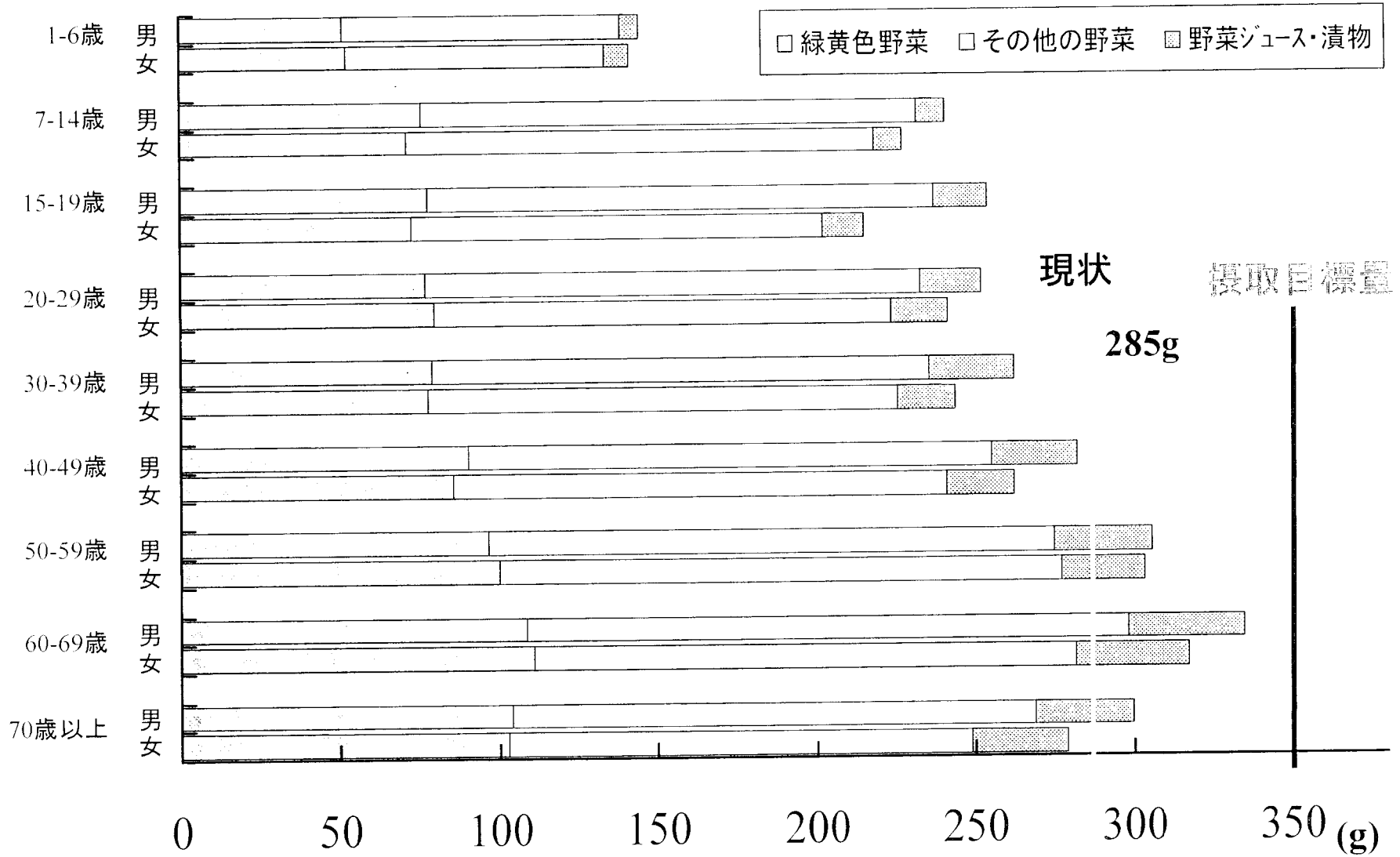


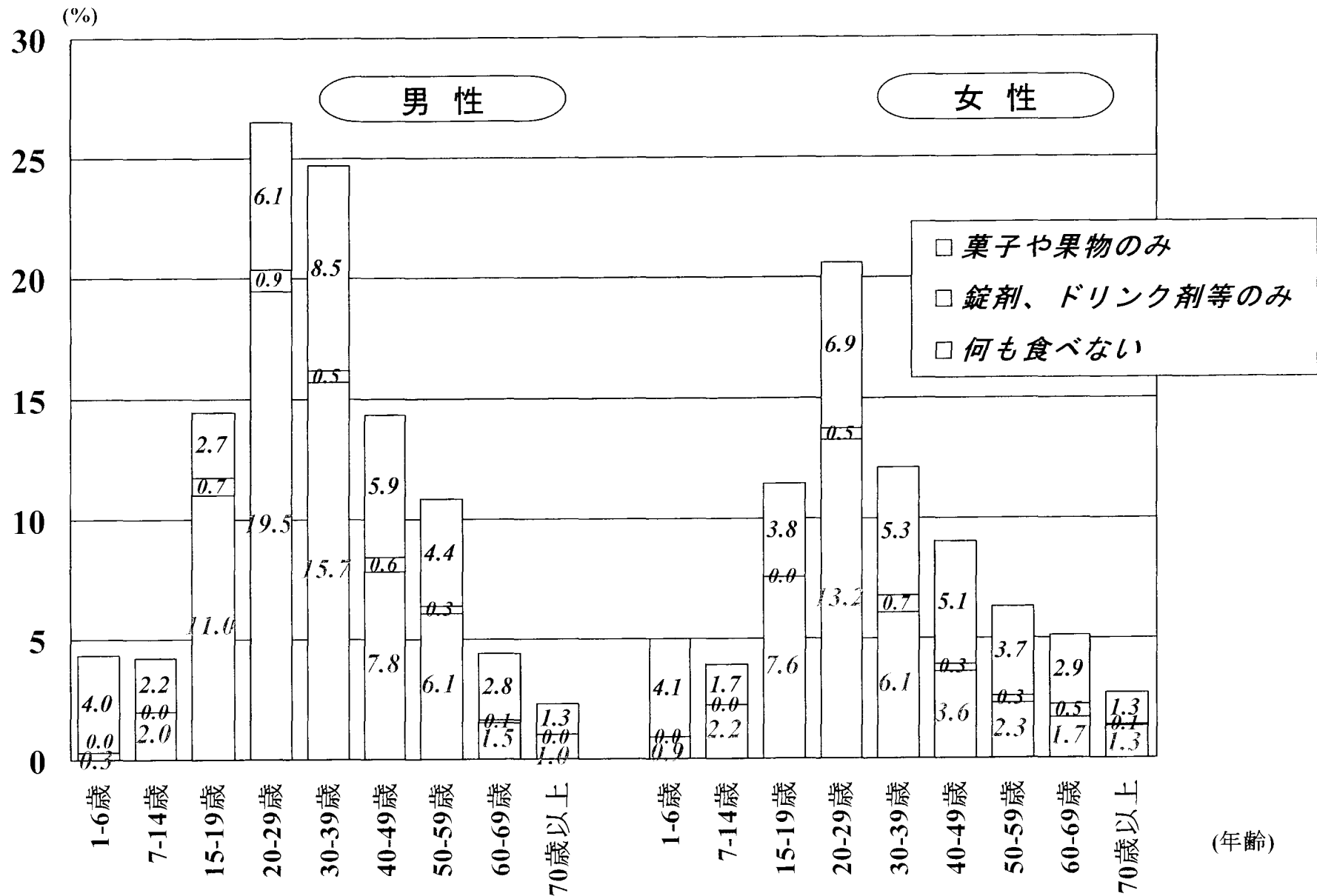
図7 野菜摂取量の現状(平成14年国民栄養調査)



分野: 栄養・食生活		
目標項目: 1.5 カルシウムに富む食品の摂取量の増加(成人)		
目標値	策定時のベースライン値(現状値) (H9年国民栄養調査)	暫定直近実績値 (H14年国民栄養調査)
牛乳・乳製品 130g以上	107g/日	146g/日
豆類 100g以上	76g/日	63g/日
緑黄色野菜 120g以上	98g/日	94g/日
コメント		
①暫定直近実績値に係るデータ分析 (データの経緯変化を踏まえた分析や必要に応じ性・年齢階級別データ等による解析)	①現状値と暫定直近実績値の比較	
	<p>○牛乳・乳製品については直接的にはデータの比較は不可能である。平成13年の食品成分表の切り替え時に、希釈水等に対応する「水コード」が導入されたことにより増加している。「水コード」については平成15年調査より各食品群への反映が詳細に行われるようになったことから、そのデータの詳細な解析を待つ必要がある。</p> <p>○豆類については、みそ類についての再分類と足し合わせにより比較可能である(旧来は豆類に分類されていた「みそ類」が、平成13年より調味料類に分類されるようになった)。</p> <p>○緑黄色野菜についてはデータの比較は可能である。</p>	
	②データの経年変化を踏まえた分析	
	<p>○牛乳・乳製品: 現時点では判定は保留。</p> <p>○豆類: みその摂取量約13gを足し合わせると、変化無し。</p> <p>○緑黄色野菜: 平成14年は、若干の減少と考えられる。</p>	
②上記データ分析に基づく今後の課題及び対策の抽出等	③詳細なデータ解析について	
	<p>○牛乳・乳製品、豆類、緑黄色野菜の摂取量については、世代間の差に着目する必要がある。特に、牛乳・乳製品については、学校給食による牛乳の供与が無くなった後の十代後半から20歳代において、摂取量が低くなる。また、豆類の摂取量については、中高年から比較すると20歳代での摂取量が少ない。</p> <p>○カルシウムに富む食品の摂取量が実質的にはほぼ横ばいと考えられることから、より実効性の高い取り組みが望まれる。</p> <p>○世代間の差に着目して、全般的に摂取量が少ない20歳代の対策が必要であると考えられる。</p>	

分野: 栄養・食生活		
目標項目: 1.7 朝食を欠食する人の減少		
目標値	策定時のベースライン値(現状値) (H9年国民栄養調査)	暫定直近実績値 (H14年国民栄養調査)
中学・高校生 0%	6.0%	4.4%
男性(20歳代) 15%以下	32.9%	26.5%
男性(30歳代) 15%以下	20.5%	24.7%
	コメント	
①暫定直近実績値に係るデータ分析 (データの経緯変化を踏まえた分析や必要に応じ性・年齢階級別データ等による解析)	①現状値と暫定直近実績値の比較	
	○比較には注意を要する。 ○平成13年調査から、食事状況の分類項目が細くなった(図8)ことから、その影響を考慮する必要がある。 ○ <u>中学・高校生では減少。</u> ○ <u>20歳代男性では減少。</u> ○ <u>30歳代男性では増加。</u>	
	②データの経年変化を踏まえた分析	
	○最も朝食欠食者の割合が大きい <u>20歳代男性</u> については、平成7年以降徐々に減少傾向にある。	
②上記データ分析に基づく今後の課題及び対策の抽出等	③詳細なデータ解析について	
	○平成9年のデータと比較して今回増加が認められた30歳代の男性においては、「何も食べない」者の割合は20歳代と比較して少なく、「菓子や果物のみ」の者の割合が高い(図8)ことに留意する必要がある。	
	○30歳代男性においては、朝食の内容と食事の質との関連等について、今後解析及び検討が必要であると考えられる。 ○目標設定時の解析では、朝食の欠食があると1日の食事全体の“栄養学的質(nutritional quality)”が悪い(具体的には、不足しがちなビタミン・ミネラル・食物繊維のエネルギー密度の低下)傾向にあることが確認されている。その点も含めた分析・検討が今後必要である。	

図8 朝食の“欠食”者の割合（平成14年国民栄養調査）



資料 4 (2)

「健康日本21」暫定直近実績値に係るデータ分析
(身体活動・運動)

分野:身体活動・運動

目標項目:2.2、2.6 日常生活における歩数の増加

目標値	策定時のベースライン値(現状値) (H9国民栄養調査)	暫定直近実績値 (H14国民栄養調査)
男性(成人) 9,200歩以上	8,202歩	7,753歩
女性(成人) 8,300歩以上	7,282歩	7,140歩
男性(70歳以上) 6,700歩以上	5,436歩	4,787歩
女性(70歳以上) 5,900歩以上	4,604歩	4,328歩

コメント

①現状値と暫定直近実績値の比較

○歩数計の機種、測定方法などは同じであるので、基本的に比較可能である。
○成人の歩数は、15歳以上のデータを基に目標値も含めて算出されているので、留意する必要がある。

②データの経年変化を踏まえた分析

○数値上の変化では平成9年の基準値に対して、男性449歩、女性は142歩、男性(70歳以上)649歩、女性(70歳以上)276歩とそれぞれ減少している。しかし、平成4年からの歩数の年次推移に関しては高齢者を測定していない平成6年のデータを除いて見ると、平成4年の男性7,512歩、女性6,518歩、男性(70歳以上)4,618歩、女性(70歳以上)3,593歩となっており、その後平成9から10年にピークとなり、その後減少傾向にある(図1、図2)。

③詳細なデータ解析について

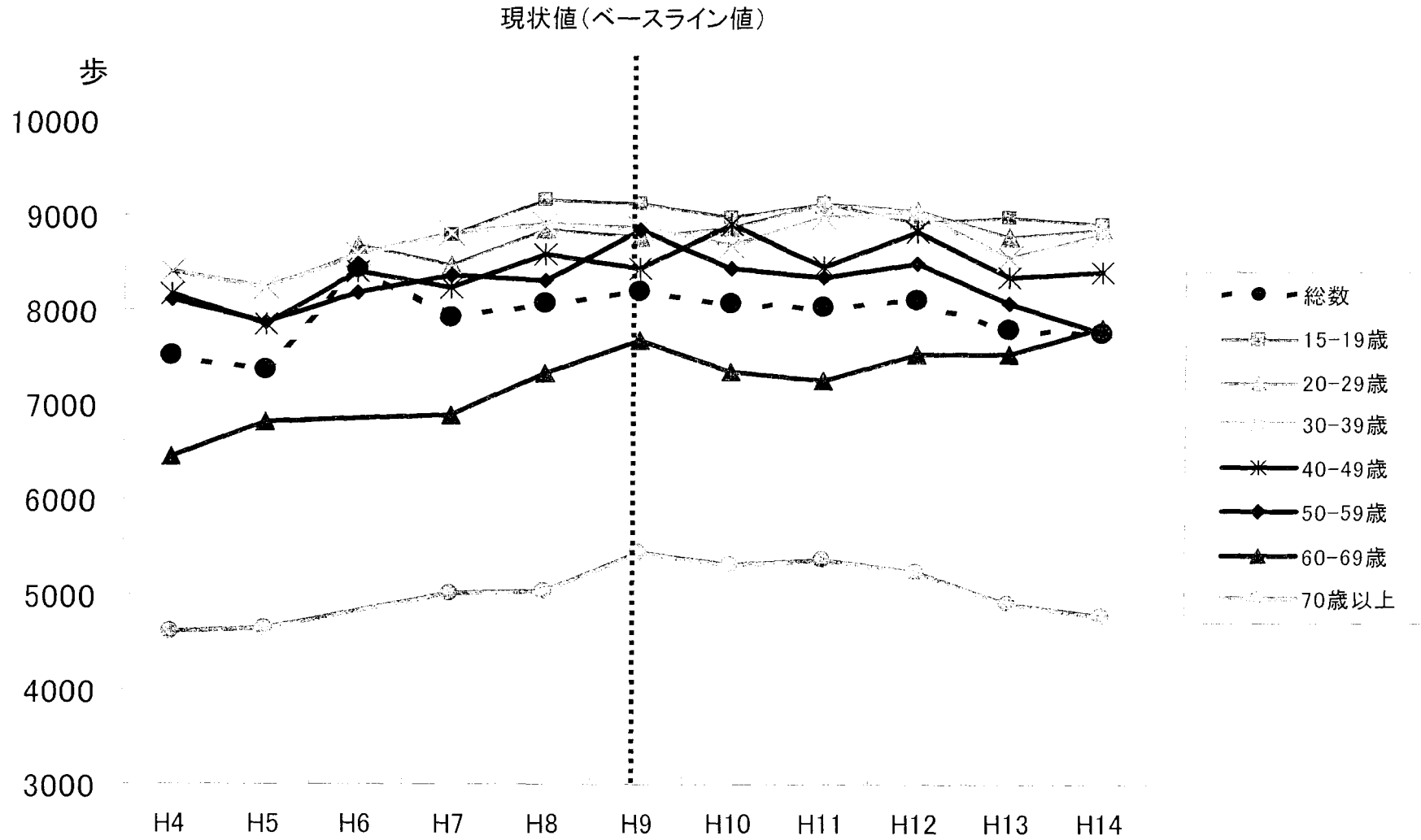
○平成9年の基準値と平成14年の暫定直近実績値を性・年齢階級別に検討したところ、男性では、20歳代から40歳代までは変化なし、50歳代では約1,100歩の減少、60歳代では変化なし、70歳以上では約650歩の減少となっている。女性では、20歳代と60歳代で400歩以上の増加、他は変化がない(図1、図2)。

①暫定直近実績値に係るデータ分析
(データの経緯変化を踏まえた分析や必要に応じ性・年齢階級別データ等による解析)

②上記データ分析に基づく今後の課題及び対策の抽出等	<p>○都道府県や市町村における健康日本21の地方計画が策定されたばかりであり、その対策の効果はこれから現れてくることが考えられる。</p> <p>○一部の年代、例えば50歳代男性において歩数の減少(約1,100歩)が認められる。この年代における自殺者の上昇等から、過重労働や仕事のストレスなどがその要因として考えられ、この年齢階層に対する地域・職域における対策の推進が必要と考えられる。</p> <p>○70歳以上男性において歩数は減少し、女性においても横ばいであり、生活機能低下の防止の観点からも地域における高年齢層に対する対策も、今後必要であると考えられる。</p>
---------------------------	--

図1

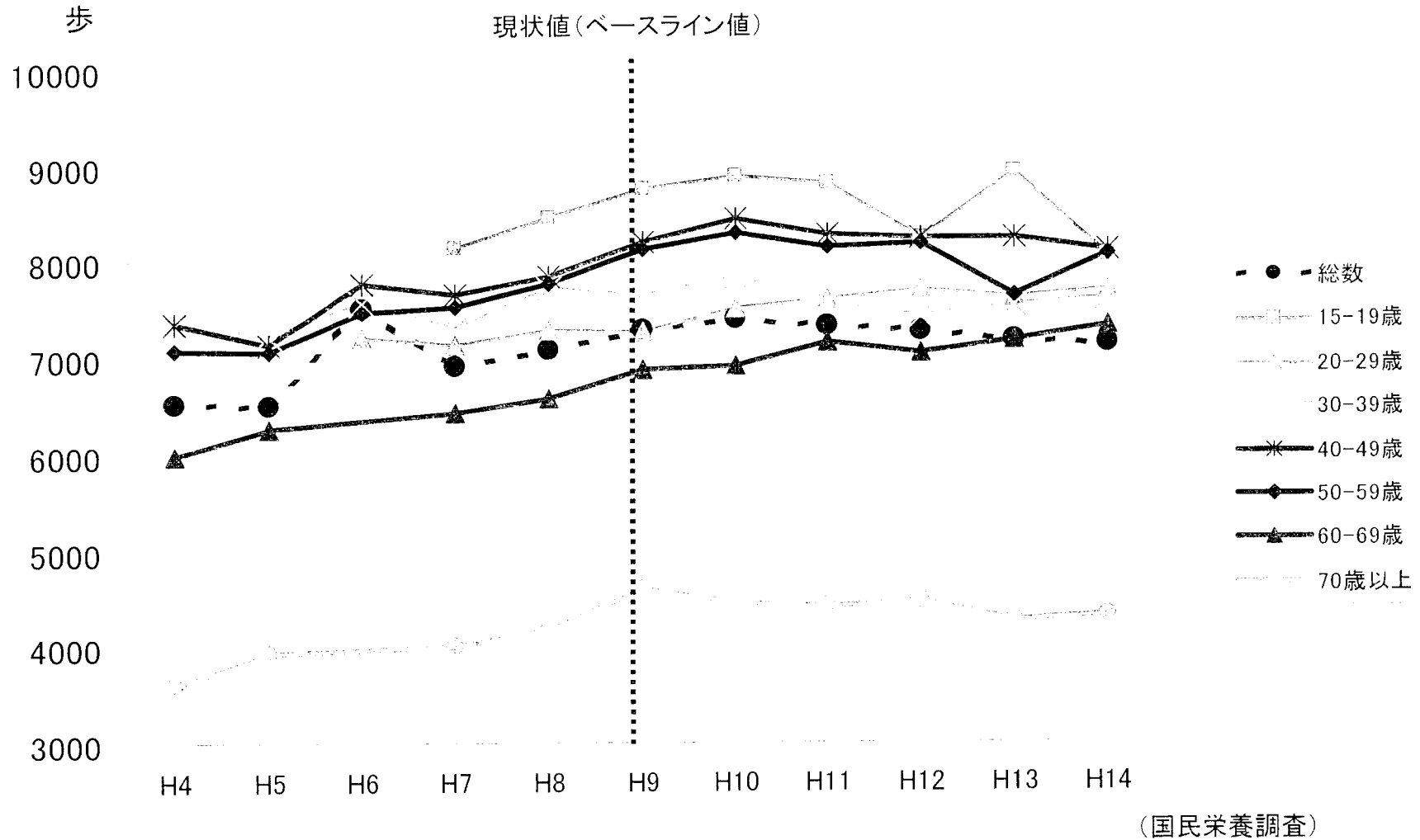
年齢階級別歩数の年次推移(男性)



(国民栄養調査)

図2

年齢階級別歩数の年次推移(女性)



分野:身体活動・運動

目標項目:2.3 運動習慣者の増加

目標値	策定時のペースライン値(現状値) (H9国民栄養調査)	暫定直近実績値 (H14国民栄養調査)
男性 39%以上	28.6%	31.6%
女性 35%以上	24.6%	28.3%

コメント

①現状値と暫定直近実績値の比較

○「運動習慣あり」(1回に30分以上の運動を週2回以上、1年間継続して行っている者)という定義は調査毎に変わっていないので、基本的に比較は可能である。

②データの経年変化を踏まえた分析

○数値上の変化では平成9年の基準値に対して、男性3%、女性は3.7%とそれぞれ増加しており、また平成9年からのトレンドも増加傾向にある。さらにデータを取り始めた昭和61年から平成14年のトレンドをみると男性は、18.7%から31.6%と漸増傾向にあり、また女性も13.4%から28.3%と同様な傾向にある(図3、4)。

③詳細なデータ解析について

○平成9年の基準値から平成14年の暫定直近実績値を性・年齢階級別に検討したところ以下のとおりであった(図3、図4)。
 ・男性の運動習慣者の割合は、20歳代から50歳代では変化がないが、60歳代では増加している。一方、70歳以上の男性の運動習慣者の割合には変化が見られない。
 ・女性では20歳代から50歳代までは変化が見られないが、60歳代、70歳以上で運動習慣者の割合は増加している。
 ・特に60歳代男性は6.5%増、60歳代女性は7.5%増、70歳以上女性は7.7%増となっており、高年齢層に運動習慣を有するものが増加している。逆に若年齢層では横ばいである。
 ・20歳代女性の運動習慣者の割合は横ばいであるが、他の年齢階層と比較して10%程度低い。

①暫定直近実績値に係るデータ分析
(データの経緯変化を踏まえた分析や必要に応じ性・年齢階級別データ等による解析)

<p>②上記データ分析に基づく今後の課題及び対策の抽出等</p>	<p>○運動習慣については、客観的に数値で表れる歩数と異なり、質問の中に「運動」の定義がなされておらず、年代によって「運動」の捉えかたが異なっている可能性(測定バイアスの可能性)がある。たとえば、高齢者では、散歩や庭仕事を運動に含んでいるが、若年成人では、運動は、テニスやジョギングのようなものを指し、ウォーキングは運動に含まれない可能性があり、また平成9年と平成14年では、国民全体で「運動」の捉えかたが変化してきている可能性もある。</p> <p>○栄養・食生活での目標項目で肥満者の割合が増加していることと関連して、肥満者と歩数や運動習慣者等との関係についての分析・検討が今後必要であると考えられる。</p> <p>○60歳代以上における運動習慣者の割合は増加しているが、その他の年齢階級層では増加傾向はなく、地域・職域における対策が必要であると考えられる。</p> <p>○20歳代女性の運動習慣者の割合は他の年齢階層と比較して低く、対策が必要であると考えられる。</p>
----------------------------------	--